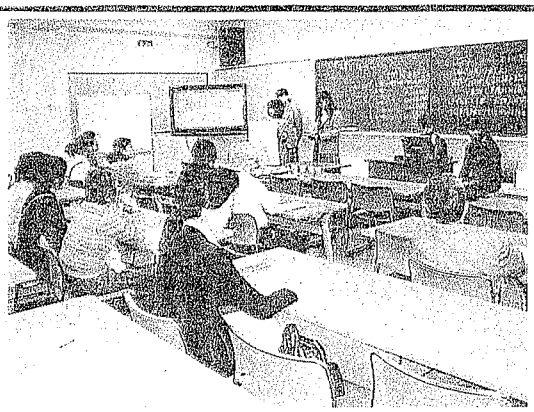
支局長からの手紙

津波防災の日に

きょう11月5日は「津波防災の日」です。ご存知でしたか？

各地に被害の出た江戸時代の安政南海地震の日に合わせて、東日本大震災の起きた2011年に制定されました。各地で防災訓練などが行われます。



津波シミュレーションについて説明する県立芦屋高校の生徒たち＝芦屋高で

津波は恐ろしい災害ではありますが、竜巻などに比べると、事前の備えが被害軽減に役立つことの多い災害と言えるでしょう。自宅や職場の海からの距離や標高を知っておく、避難経路を考えておく、近くの津波避難ビルを知っておくことなど、事前にできることが、かなりあります。

そして何より、大切なのは「地震の後には素早く高台へ避難する」という原則を徹底することでしょう。東日本大震災でも、避難訓練を重ねていた多くの児童生徒が高台に避難できた、という例が報告されています。

先月28日、芦屋市の県立芦屋高校ボランティア部が、自分たちで作った南海トラフ巨大地震の際の津波避難のシミュレーションを地元住民に説明する会がありました。高校生たちは芦屋市内を歩き、避難できる道を3本に絞り、高校周辺の住民がそこを徒歩で避難するという想定で、コンピューターでシミュレーションをしました。結論として「地震の直後に避難を始めると全員が避難できるが、1時間後に避難を始めると、避難出来ない人が出てくる」ということが画像ではっきりわかる、というものになっていました。

住民の方も興味を持ったようで、約40人が参加し、「想定では、どのくらいの高さの波が来るのか」など熱心に質問していました。高校生たちは阪神大震災の時には生まれておらず、地域のみなさんは被災した人が大半です。でも「災害のことなら自分たちの方が詳しい」という態度をとらず、高校生に一生懸命に質問する様子は、立派だなあ、と思いました。

芦屋高校ボランティア部はその阪神大震災の時にできたそうです。募金活動などさまざまなボランティア活動をする一方で、地域と連携してのこうした防災活動に力を入れています。シミュレーションを作る中でまちを歩き、地域に阪神大震災の経験について話を聞いたのはいい経験になったようです。

部長の田中芳乃佳さん（2年）は「活動を通じて防災の意識は高まったと思います。もっと細かいシミュレーションが作れないか、と考えています」と話していました。

南海トラフ巨大地震は、いつ来るか分かりません。どう備えるか。学校で、地域で、職場で、世代や立場を超えて顔を合わせて話し合う機会を少しでも増やすことが、命を守ることにつながるでしょう。東日本大震災の貴重な教訓だと思います。

【阪神支局長・伊地知克介】

毎日新聞阪神版（２０１５年１１月５日付朝刊）